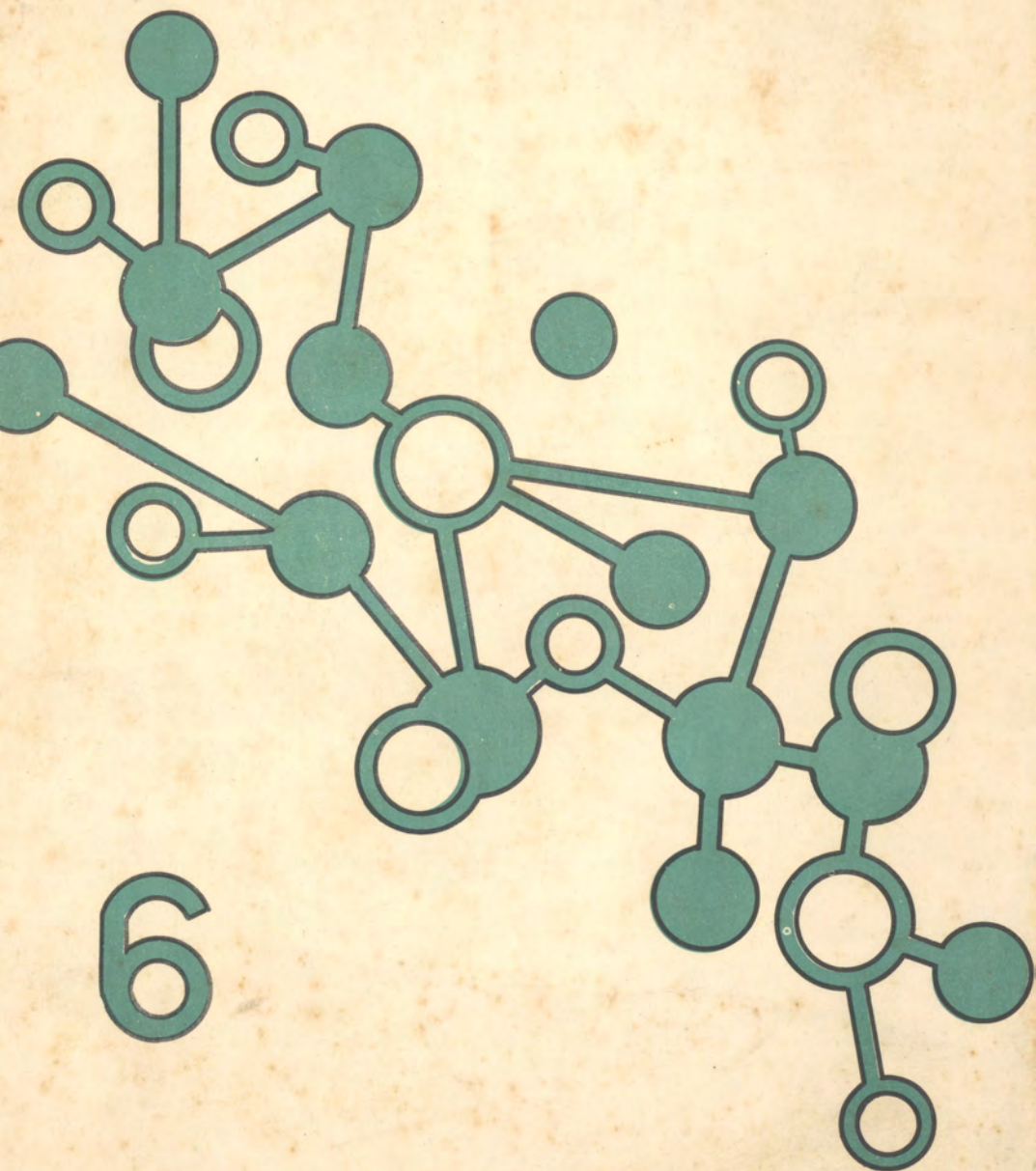


工化時報



6

卷 頭 言

最近ある雑誌で、「科学者の迷い」と云う記事を見た。その一部に、日本の科学者、教育家は次第に分科して行き、学会には次々に新しいものが生れ、中には全く同じ様な内容のものがいくつも出来て不便さを感じている。また教育制度も教養と専門と完全に分立し、専門学科も次第に分科し、個々の統一、関連が円滑に行かないような吾が国の派閥的な弊害が論じてあつた。目を学内に転じ、化学科関係の学生、卒業生の状態を見ると、同様なことがないとは断言出来ない状態である。新旧の区別なく出来る目的のため発足した工化会が出来ているのであるから、今後会員一同、この点大いに目覚たく思う次第である。

また会報には、会員の研究業績、学内の設備の紹介を大いにとり入れることを希望する。しかし学外会員の活動状況をもれなく集録することは、今日の所非常に困難と感じる次第であるが、今後関係者の絶大な援助をお願いしたく思います。

私のみた米国の会社（U.O.P社）について

柏原 剛（新学1-3）

編集子より首題に関する執筆を依頼されましたので、こゝにU.O.P社（Universal oil Products co.）の概要を紹介し、更に昨年九月末より約六ヶ月間このU.O.P社に駐在する機会を得ましたのでこのU.O.P社について若干感想を述べて見たいと思います。

U.O.P社の所在

U.O.P社は米国イリノイ州のシカゴ市デスプレインズに本社と研究所を置き、また同州リバーサイドに中間試験設備と、触媒製造部門（ユニバーサル・ポリケミデビジョン）を持つております。

U.O.P社とは

U.O.P社を一口に云えば石油精製・石油化学プロセスを開発し、世界の自由諸国へそのプロセスを提供している技術開発専門会社であります。即ち、ある一つのプロセスを開発し、提供するまでには物理化学及び化学的研究等の基礎研究より中間設備試験、更に実装置へまで持つて行くための設計を行う必要があります。U.O.P社はこれを業務とし、その収入の殆んどは特許料及び設計料でまかなわれております。

U.O.P社の歩み

「今日の文化は石油の中に浮いている」といういい方をしたアメリカ人があります。石油精製・石油化学の分野で、世界最大の生産力を有し、またその技術開発の先進国として、今日不動の地位を占めている国の人らしい考え方であると思います。アメリカ人が誇るこの地位は、決して一朝にしてつくられたものではありません。一九一〇年代に始まるはげしい技術競争を経て、今日の大をなすにいたつた歴史の重みがあるからであり

ます。

一九一〇年代といえは原油を蒸留するだけでガソリンをとる在来技術では間に合わないほどに内燃機関が発展した時代であります。この時代の最尖端をゆく研究テーマの一つは重質油を熱で分解してガソリンをできるだけ多くとろうとする、いわゆる熱分解プロセスの開発にありました。

一九一四年に設立されたUOP社は、まさにこのテーマと取組んで成功した会社であります。熱分解にともなつて発生するコークスの装置内への沈積を極力おさえるように設計された、UOP社のダブス式連続熱分解装置は極めて優秀な性能をもつていました。一九二一年に第一号のコマーシャルプラントが米国内で建設されて以来、この装置は世界中に普及され、日本でも一九二四年日本石油(鶴見)をはじめ数社に導入されました。

UOP社は続いて重合法、異性化法、アルキレーション法などによる航空機用高オクタン価ガソリンの製造プロセスにも進出し、更にこれを基礎として石油化学プロセスにも進出して今日の指導的な地位をきずくにいたつたのであります。

UOP社がこのように工業化技術で頭角をあらわすもとなつたのは、同社が石油の物理学的・化学的基礎研究にも非常に力をそそいでいたからであつたのであります。即ち、石油を構成する各種炭化水素の物質をよくマスターした上で、触媒化学及び化学工学の面でもバイオニアとしての活動をしたからであります。今日同社は約一九〇〇件の米国特許と約一六〇〇件の諸外国特許を所有しております。

UOP社の機構及び特徴

UOP社の機構は次の図に示すように五つの部門に別れております。UOP社の社員は約一五〇〇名ほどおり、その過半は大学あるいは専門学校出身の技術者であり、重役もすべて技術畑出身者で固めています。

紙面の都合もあり、各部門の機能は割愛しますが、このUOP社の特長といったものを二、三紹介します。

大学の新卒は全てパイロット・プラント部門で一年乃至二年間教育された後、更に実装置の試運転に参加して、よくプロセスの実体を習熟してから、各人それぞれ好みの部門に配属されるしくみになつております。従つて、実際にエンジニアリングを、また基礎研究等に従事する者もよく装置の実体を理解しているので、夫々各人の経験を生かされ、更によいプロセスが生みだされるわけであります。

また、特許部についていふならば大学を出たケミカルエンジニアは前述の如くトレーニングを受けたのち更に法律を勉強するため、大学の夜間部に通い法学士を得ております。

尚、研究陣については現在次の三つのグループに分けられております。

(一) ヘンセル博士(プラットフォーミング法の発明者)をヘッドとする石油精製に関する研究。

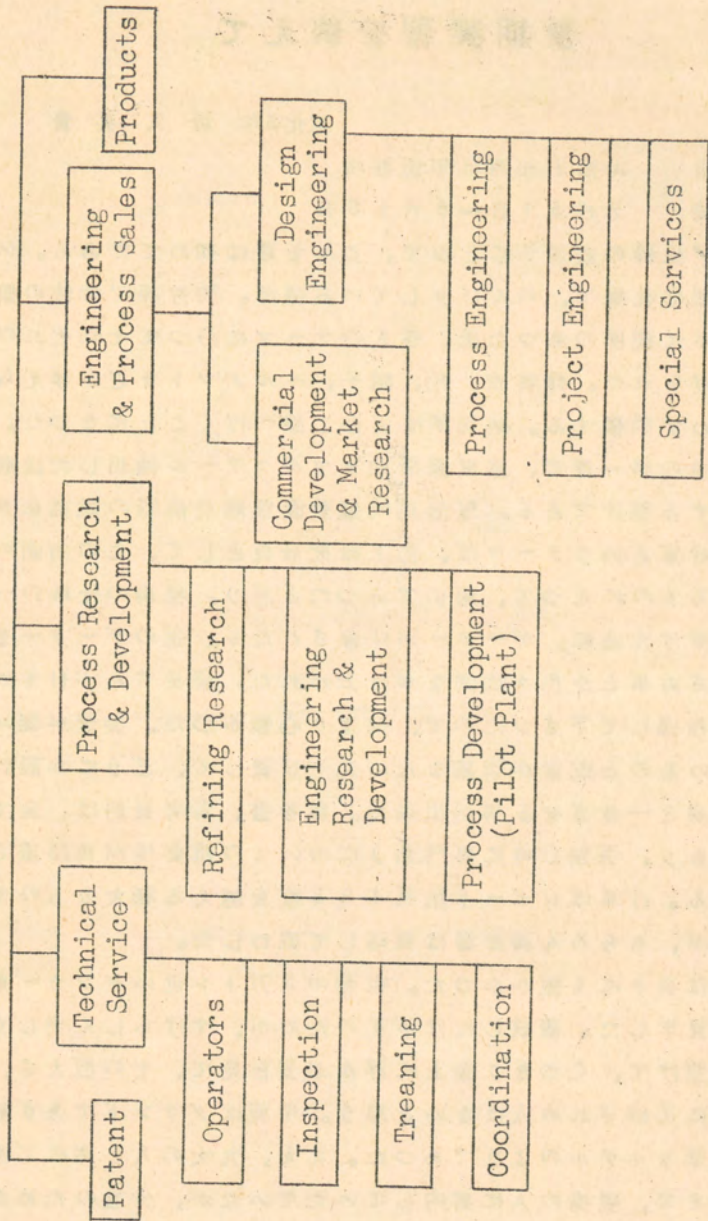
(二) マツコリ博士をヘッドとする物理学的基礎研究。

これらの研究グループによつて開発された石油精製、石油化学に関するプロセスは現在、数十プロセスにのぼつております。

なお、UOP社では各プロセスに用いる触媒の研究開発も行なつておりますが、他に装置材料腐蝕防止剤、石油のガム化防止剤から食品の防腐剤にいたるまでの多方面にわたる薬品類を發明、商品化しております。

その他種々割愛しましたけれども何れの機会に紹介する事に致します。

U. O. P.



夏期実習を終えて

工化3年 坂入 英貴

実習場所 大協石油四日市製油所

実習期間 7月31日～8月18日

暑い／生粋の道産子にとつて、こんな夏は初めてである。いつも今頃は札幌で、のんびりしている頃だ。勤労課で会社の概要について説明のあつた後、各人のテーマに沿つてそれぞれの課に分けられた。作業衣、靴、帽子、ヘルメットなどが与えられ、思わず緊張する。結局僕は製油二課へ行くことになつた。此は現場の第一線で、重質潤滑油をフルフルール抽出した後脱蠟回収する部分である。溶解剤脱蠟装置各熱交換器の総括伝熱係数の計算というテーマは、化工研究会員として、この方面の興味あるものにとつて、適切であつたと思う。現場の仕事の一部を引受けた為に、データが保管されたり、生のデータを持ち出さぬ事とか色々面倒な事を云われた。係長さんが付きつきりで指導して下さつたので、何より心強かつた。装置が混み入っているのと配管が複雑なため丸一日費して、どうにか設計図と現場を一致させる事が出来た。参考書、参考資料は、全て原書であり、英語(特に専門語)についての重要性が再認識させられる。計算はレポート用紙100枚を越える膨大なものであつたが、もちろん報告書は簡略して表わした。

三週間は余りにも短かつた。実習中5万トン近いタンカー東海丸を見学した。着航したばかりのためか、すばらしく美しく原油を空けて、くつきり海上に浮かぶ姿を見て、その巨大さ、見事さに圧倒されぬ人はないと思う。甲板はグラウンドであり船内は豪華なホテルのようであつた。北大、九大の人と共に工場の隅々まで、現場の人に案内していただいたが、少数のためか特に丁寧であつた。フードリーの80m近い装置から四日市コ

ンビナートを一望したが、その眼前に迫る雄大な景色は今でも忘れられない。余暇は名占屋城へ行つたり、四日市の市内見学で費した。又夜は他の実習生と碁を楽しんだ。非常に親切にしてくれた会社の人達には全く頭が下る。辛い実習だったが、それ以上に楽しい有益な実習だった。後輩諸君も是非実習に行くことをお進めする。最後に諸君の健闘を祈つて感想とする。

工化1部3年 荻本幸作

夏休みを利用して、北海道苫小牧市の王子製紙株式会社の実習に行つた。苫小牧市の人口は約7万人(人に聞いたので保証は出来ないが、7万人の内の約2割が直接王子製紙に関係のある人だという事である。)北海道の町らしく土地は広く、そして舗装こそ完全にされていないが、道路はゴパンの目のように整備され、来年の完成を前にして工業港としての港の改築と、積極的に工業都市としての躍進を押し進めている町である。その町に工場を持つ古い伝統を持つた王子製紙は、苫小牧の王子であり、また王子の苫小牧と云つた感のする存在である。

さて、その王子製紙において自分の実習目的と、そして実習の内容について証そう。

就職が自分の一生を左右すると云つても過言ではあるまい。それはどこの会社というよりも、むしろ、どんな雰囲気の中でどんな仕事をするかが重大な問題となろう。従つて実習において、自分をその場(研究室とか、工場現場)、その雰囲気に入れて、その中における自分自身を知り、理解する事が大切である。つまり、自分を充分知つた上で就職の事が初めて考えられるのであり、実習が自分を知るための一つの手段なのである。

内容については、王子製紙の研究部において、パルプ(CGP・SCP)廃液中のナトリウムの回収というテーマにおいて、イオン交換樹脂、分光光電光度計、キレート滴定、白金ルツボ、

そして中和滴定によつて、ナトリウム、カルシウム、マグネシウム、そして鉄の分析実験、又、イオン交換樹脂 (Am·IR·RO) に廃液を通して金属陽イオン (主にナトリウム) と交換せしめこれを 6% 亜硫酸液で亜硫酸ソーダとして回収、これを同一樹脂において繰り返して、樹脂の能力と回収率とを求める実験を行つた。

以上のように、主に色々な分析実験を行つたのであるが、云うならば、廃液の分析ではなくして、自分の分析なのである。

バスの中の思い出

学部2年 関根宣明

青森を出てまもなく八甲田連峰の勇姿が、窓外に見え出す頃から、空には雲の厚みが増していまにも泣きだしそうになつた。

去る8月10日早朝上野を発つて以来今日で8日目、晴天に恵まれ松島、蔵王、平泉、陸中とその美しさをじつくりとまではいかないが存分に味わつてきたのにここえきて鉛色の空の歓迎には残念である。これから訪れるせつかくの名勝、奥入瀬溪流、十和田湖が台なしに思われる。

窓には成長したクロマツの並木が次々とあらわれ雪国の面影をあらわしている。時々思い出したようにまだ熟れていないリンゴが顔を思い出す。二時間もするとあたりはエゾの深い木立につつまれ、幾重にも重なつた山々や青森を見わたせた車外も今は太い白樺、クロマツなど一度も手を加えられたことのないような森また森となりバスはその谷間を走つて行く。始めて見たうつそうとした森の景色に見とれていたのも始めの間、隣りに座っている人に怒る怒る話しかけて見ると、以外なことに話は進展しいつしか天候も忘れて話し込んでしまった。

奥入瀬の溪流にさしかかる頃からもやがたち始め午後三時というのにあたりは写真撮影にも困難な程の暗さ。右曲り左曲り急流になつてくだかれたり、白しぶきをあげたりして流れている溪流の様は、人間には手のくたしょうのない自然の神秘さ、すばらしい魅力に友人を始め、バスガイドの存在をも忘れてしまった。先日の洞爺丸台風で作られたと云う昭和池、頂度京都の寺のよう感じで池の中にポツカリと石頭を出していた。こんな山奥でサビが感じられるとは長旅行の郷愁の念だろうか。奥入瀬の溪流にかけられたある橋の中央で願ひごとをすると一年以内になえられるということ。某人と散歩出来るように願

つたのだが残念ながらまた実現しない。

バスの中だつたからいけないのだろうか？　そういえばそんなことをいつていたようだ。

こけむした緑のかたまりが溪流にうたれているのを見とれているうちに急に前方がひらけてきた。木立はどうやら終つたようである。霧にかこまれた十和田湖の岸がさざ波をたてているのがうかがえる。やがて毎度御乗車ありがとうございますという例の車掌さんの声が聞えてきた。

たわごと！

A B C

タバコから出るひとすじの煙、それをじつとみつめていると自分がそれにより人の見ることの出来ないある所へつれていかれる様を気がする。

その場所はだれにも分らない。でも、今のよごれた社会とちがい、もつと住みよい所だろうと思う。

どこからともなくただよってくる音楽、緑の木々に囲まれ、山の美しさを湖面一ぱいに写している湖、その上に浮んでいる白鳥、多分その音楽は皆の好きなあの「白鳥の湖」かもしれない。今にもおどりだしたくなる様なあのメロディー、それを聞きながら語る恋、自由でだれにもじやまされない恋、二人だけの世界、原始時代の様な生活、時間に追いまくられている現代そんなものからのがれ、うせ、いつわりのある社会からのがれもつと赤肌に自分の云いたい事を好きなだけ云える社会。上下富貧のない社会、だれもが同じ様にくらせるところ。他人を余りにも敵視しているところから離れ、「皆仲間だ」と云える様な社会そんなところに住みたい。

でもそれは不可能だ。不可能と分つていても想像してみたくなる。おろかなことかもしれない。他人にお前は「バカだ」と云われるだろう。かまわない。どうしても考えたくなる。真夏の夜の夢かもしれないが、

二部工業化学研究会

二部工化に於ける研究会として此度紹介する機会を得、その性質と内容を寸時とも把握戴ければ幸に存じます。

回顧するに発会七年、会員の多くは昼日の勤務に従事し、夜間に於ける学習と、更にサークル活動にはと、時間的制約の条件を第一とし、曲折の沙汰もその一部を知る現在で、発足当時の停滞も周知の程である。

しかし現百余名の人員を有し、遅々たる歩みにも発展の余上真に軌道上にあるとしても決して過言ではあるまい。

勿論學術発展の目的を主とするが研究会の使命と解する時、遺憾にして二部に於けるはそれを第二の課題とするを余儀無い次第である。何故ならば、入会しその活動に学徒の喜びを感じ得る迄の時間の無い多くの学生、一定の授業の時間ですら満足に出席する事の出来ず終電車に帰宅を余儀無くされる者、こうした現状は研究会いや、学友さえも知る機会の少い實際であるからである。

当研究会は第一の使命よりもまずこの人間関係、研究会を通じ全学年を縦につなげる“場”としての条件が第一と思われるのである。この様な立場のもとに“組織”が出来上つていのである。元来“組織”は人間が生活していくのに、より便利の為に生れ、人間と云う不完全で弱い動物がより強く、より発展するには個人より集団の方が都合が良いと云う極く自然な、もつともを理由によつて集団が生れ、それに基づいて“組織”が作られたのである。つまり組織は個人が個人としてより完全に存在出来る場であるはずである。個人はその組織を作るものであり、その中で生きる事が出来るものであるはずである。にもかかわらず、現代社会に於いては組織は個人を無視し個人が、個人であろうとすることを許さない。

現代の組織は人間の存在を規定し、人間は個人である前に組織の中の一部でなければならなくなつてきている。

この様な現代に於いて、当研究会は、個人を制約するものでなく、本来の目的である個人がより強く、より発展するためのものでなくてはならない。研究会は会員によつて動かされるものであつて、研究会に会員が動かされるものではないのである。我々はいつもそうあらねばならぬ。然る後の活動に於いては、有機班、無機班の二区を設け、工学祭に於いてその研究の発表の場とするは周知の通りである。

前年度に於いても有機班の、珪素樹脂、接着剤の発表、無機班の工業用水、汚水（汚河）の改善利用、地下資源の水質検査と毎年、その活動振りに来客の好感を得ている事は、工学祭の現実を知る人は周知戴けるはずである。又年一回或は二回の会報の発巻も年々その頁を増加し、研究発表の場の一つとしている事である。尚本年より新たに化学工学を設け三区の班によつて制約のない、新しい時代の新しい組織で運営されているのである。

36年度 工化研究会長

関 亘

[母校だより]

永井彰一郎氏欧米視察ノ

永井彰一郎氏は日本学術会議より派遣され、イギリスのロンドンに於ける英国鉄鋼学会年会、デンマークのコペンハーゲンに於ける第8回世界窯業会議、米国ワシントンに於ける第6回ガラス会議に出席のため、去る4月29日午後9時、スカンジナビア航空ジェット機により羽田空港を出発された。

英国を初め西独、スイス、米国等欧米各国の各研究所、工場をまわられて7月14日に帰国された。

工業化学科親睦旅行ノ

6月16日、新入生及び移頂生の歓迎と化学科全体の親睦の為に、三浦半島一周バス旅行が催された。参加したのは、生徒約160名、先生1人で3台のバスに分乗し、東京という雑踏を抜け出て初夏の新緑に包まれた三浦路へ。観音崎、久里浜として「夢の大橋」を渡つて城ガ島へと……。

誰もが雨がふるふる城ガ島の磯に……。と白秋の詩を思い出し幾分ロマンチックな気持ちにひたり、青々とした東京湾をいづもとは別の気持ちで眺めたのも郊外ならでのことであろう。

特に緑のない理工学部の校舎に於ては味うことの出来ないものを、年に一度のこの機会に味うことができたのはなによりのことでした。

しかしより多数の先生とより多数の学生が参加していたならば、その目的は十分に達成されていたであろう。

互に明日からの学校生活を考え、みんなは夕暮の雑踏東京へ戻つていった。

〔会 員 消 息〕

福島敏郎氏：（新学 2 - 2）

工業奨励館化学部に勤務され、来る九月末には約一ヶ年の予定で欧米主としてスイスへ留学されることになりました。

三田郁夫氏：（新学 1 - 2、大学院 7）

福島氏とやはり同じ工業奨励館化学部に勤務され、来る九月中旬、インドへ金属表面処理の指導のため出張されます。

田村利武氏：（新学 2 - 1）

カナダへ留学

10月より1年間の予定でカナダのフアリファクス市漁業調査会付属研究所のアイドラー市とステロイド化学の共同研究をすべく招かれ、去る10月2日出立された。

宮原 巍氏ヒマラヤ探険隊に

新学1部6回卒の宮原氏は、日本大学ムクト・ヒマール学術探険隊の一員として37年3月1日東京を出発、ムクト・ヒマールを始めダウラギリ山系の未登峰の初登頂に成功、少数パーティーによる探険隊としては、最長の足跡をネパールに印して、7月下旬帰国。

宮崎昭二郎氏ヨーロッパに

長谷川香料KKの宮崎氏（新学1部1回卒）は香料工業と業界事情視察の為フランス、スイス並びにヨーロッパ各国を廻り、去る3月に帰国された。

37年度工学祭及び本年度の 各研究会の活動状況について

関 慎太郎

本年度の工学祭に於て、工業化学科では「暮しと化学」という統一テーマのもとに展示、発表を行う。

昨年度及び一昨年度の統一テーマは各々「石油化学と工業用水」、「石炭と海水」という大きなものであつたので、本年度の「暮しと化学」という統一テーマは大分性が異つている。しかしこの「暮しと化学」というテーマは扱い方によつては相当に範囲が大きくなつて手に負えなくなつてしまふし、かといつてあまり簡単に扱うというわけにもいかない。その点が各研究会でも苦心した点であろうと思われる。

昨年度まであつた12の研究会のうち、本年度になつて電気研究会が人員不足のため廃止されたのは大変残念であるが、それでも又有志が集つて同好会を作ろうという動きが見られるのは喜ばしいことである。

この暮しと化学というテーマが最終的に決定したのは6月の末になつてからであるが、4月に新学期が始まる頃からだいたいのこのよ様なテーマになることが決つていたので、各研究会の本年度の研究もこの線にそつて活動してゐたようである。

今回の発表にあつて、我々は化学が我々の生活の中に占める割合の大きさを認識させ理解させることを主眼とした。

以下、各研究会の工学祭に関連した活動状況を簡単に述べる。

「無機化学研究会」

本年度は、セメントの、JISの規格にもとづく化学分析、及びセメントの製造工程についての研究、実験を主体として活動を行つてゐる。この他に混合セメントに関する種々の研究を

している。

「有機合成研究会」

工学祭のテーマである「暮らしと化学」にそつて、生活に密接に関係のある合成洗剤及び化学調味料の合成を選び、前者ではアルキルベンゼンスルホン酸ナトリウムを、後者ではグルタミン酸ナトリウムの合成実験を行つた。

「燃料化学研究会」

ナイロンや合成樹脂の合成法等を研究しており、実験としてはクナン法による石炭酸の合成実験とその石炭酸からのアジピン酸の合成、ベークライトの合成、又サリチル酸を経てのアセチルサリチル酸の合成などを行つた。又、ガソリンの硫黄分、引火点等の分析実験を行つている。

「染料化学研究会」

各種染料による染色試験、繊維上での染料抽出テスト等の種の試験、又各種染料の合成実験を行う。

「食品研究会」

溶性サツカリンの合成、グルタミン酸ナトリウムの合成、糖の定量、ソツクスレー抽出器による大豆油の抽出、分析、還元糖の分析、酒の中の酒精の分析、ペーパークロマトによる食品の分析を行い工学祭にそなえている。

「化学工学研究会」

甘糖の粗糖を精製糖とする Process を選んだ。粗糖をマグマとし、洗糖分離機、炭酸飽充塔、スイートランド逕過、カーボンミキサーその他種々の精製行程を経て製品となるまでの

ものである。

「金属化学研究会」

家庭でできる防食法というテーマを選び、例えば一般に鉄は錆るのが当然だという考えがあるが、方法によつては殆んど錆びないようにすることも可能であるということを理解させる目的として活動している。

「高分子化学研究会」

「身近な高分子」についての研究をして居り、スチロール樹脂、アクリス酸系樹脂、酢酸ビニール系樹脂、ビニールアルコール系樹脂等の高分子合成樹脂について研究している。

「繊維素化学研究会」

テーマとしてセロファンを選び、各工場へ行つて調査したりして実験、研究を行つているが、本年度は活動人員が少ないためにより充実した研究ができていないのは残念である。

「油脂化学研究会」

二年生主体の基礎研究の他に「マーガリンの製法」というテーマを選び、主原料、副原料及びその製造行程に関する調査、研究を行つている。

就 職 状 況

(1 0 月 1 5 日 現 在)

卒業予定者の就職状況は、経済事情悪化のゆえから懸念されていたが、いざフタをあけてみると希望者に対する決定者(内定者)の割合は約82%と昨年の同期と同程度の値を示している。しかし不況の影響は見のがしがたく、出足がおそかつたり昨年のように少数の大企業に集中的に決定するという傾向から分散的に広い範囲にわたって就職するという傾向が見られる。尚未決定組の大部分は二社以上内定してしまい発表に困つているという学生であり、いずれ決定するものと思われる。

(順 不 定)

鉄 興 社	有泉圭助
東 洋 棉 花	浅野 熙
モ ビ ー ル 石 油	四十物治吉郎、渡辺輝夫
日本ライヒホール	飯島雅晴
日 本 石 油	猪股正幸
日本カーバイト工業	伊藤敬一、奥山 崇
片 岡 電 気	今瀬敏行
八 幡 化 工	稲垣 甫
シ エ ル 石 油	稲田邦直
資 生 堂	市来哲郎
新 潟 鉄 工 所	井野二陸、竹内栄多、河田俊一
藤 倉 ゴ ム	岩本恒夫、小西誠之、吉崎 猛
明 治 製 糖	小栗弘夫、長坂忠良
大 日 本 印 刷	大島重行
日 本 ゼ オ ン	大石 哲
木 下 産 商	大野維夫
村 田 製 作 所	小沢岡一

ブリジストンタイヤ
市川毛織
共和レザー
東洋ゴム
大日本セルロイド
横浜ゴム製造

日本飛機
大機ゴム
日東電機工業
高島
大内新興化学工業
三菱セメント
宇部興産
大日本製積化学
長瀬産業
日本加工製紙
大野機械
三菱造船
磐城セメント
東京特殊電線
日本トレーディング
日本化工油
山内製薬
日本硝子
藤永田造船
保谷ガラス
マクセル電気
大協石油

大橋隆、生駒二郎
大場秋蔵
加藤隆一、高橋紘一
香月是利、白鳥照道
加漱益雄
門倉憲一、田口久晃、渡辺源三、
梅田高生
加納立彰
君島敏夫
木内和夫
栗原広昭
小島辰夫
甲野昭洋
小林一三
小松允
佐藤昱彦
斎藤輝男、村越郷史
佐藤誠
沢田璋市
坂本一
白坂寿康
塩崎紘一、中沢隆夫
鈴木幹雄
関口三男
高橋宏
田部睦巳
近野光夫
塚田公紀
永田正巳

岩井産業	西浪毅
日本オイルシール	西山孝彦
兼松	野口弘行
第一セメント	萩原徹也
佐々木ガラス	羽鳥修
プリンス自動車工業	原正樹
日本コロンビア	堀越清治
小野田セメント	丸島秀介
東洋化学	松本彰夫
沖繩酸素	真喜屋
安宅産業	村田正徳
日立製作所	森佳治
興国化学工業	百瀬雅彦
美濃窯業	百瀬淑
野沢セメント	山根治
鋼管化学工業	山本忠雄
昭栄化学	山本豊
三菱商事	渡辺益夫
東邦化学	渡辺武、岩田正明
日本蒸留工業	宇恵秀和
荒川材産化	加藤和彦
ヂーゼル機械	渡部治
倉敷レーヨン	横山勝則、大西弘之
静岡ガス	飯塚正通
パイロット万年筆	宇治邦彦、山本益世
日石ガス	久喜徹
三共有合	日下部敏信
日鉄化学工業	小菅清光
日本防蝕	後藤昌之

積水	スポンジ	小松崎信之
日本	油脂	鈴木和夫
北海道	ガス	高橋要行
関東	電化工業	田辺成美
小川	香料	成石典子
凸板	印刷	野田義恭
東亜	燃料	長谷川明夫
西川	ゴム工業	原田文雄
鬼怒川	ゴム	町井靖明
大日本	インキ製造	渡辺長幸
八欧	電気	中原
大昭和	製紙	神谷幸
関西	ペイント	佐藤健一、坂上慶司

庶務委員会報告

工化会が発足して5年を数え、その間新会員も大分増えましたので、今回は庶務委員会報告よりみた工化会5年間の歩みをたどり、参考に供したいと思ひます。

昭和33年10月11日、18日、25日 山ノ上ホテル他会場にて工化会設立準備委員会、工業化学科の職員・学生・卒業生を一丸とした会をつくつて縦・横のつながりを密にし科の発展に寄与したい。

昭和33年11月1日 工化会設立総会＝第1回工化会総会於工化科2号館屋上、参加者60名、設立経過報告および工化会会則案審議、工化会会長中原万次郎、副会長松本太郎・田所利男、他の役員選出。

昭和33年12月6日 第1回評議員会、於2号館22講堂出席者26名、会則改正、会誌の性格発刊、名簿(職域別)編纂、会費の件。

昭和34年1月14日 第1回役員会、山ノ上ホテル、出席者17名、役員数、会費支払、会誌発刊(工化時報第1号)を34年3月25日迄に準備配布。

昭和34年9月19日 学内役員会、会則改正案検討。

昭和34年10月10日 第2回役員会、会則改正案、総会スケジュール、各委員会報告。

昭和34年11月2日 第2回工化会総会、於レストラン・ランチオン、出席者59名、経過報告、会則改正、予算審議、評議員・役員選出、会長中原万次郎、副会長松本太郎・龜ヶ森進、他役員選出決定。

昭和34年11月24日 学内役員会、工化時報(第2号)発刊、名簿訂正。

昭和34年11月28日 第1回役員会、上記の件およびそ

の他について。

昭和35年10月10日 第2回役員会、於理工学部大学院会議室、会則改正案、総会スケジュール、各委員会報告、次年度役員候補選出の件。

昭和35年11月2日 第3回工化会総会、於理工学部5号館会議室、経過報告、会則改正、評議員・役員選出、会長中原万次郎、副会長玉置彌栄、龜ヶ森進、他役員選出。

昭和36年2月4日 第1回役員会、於理工学部5号館807号室、工化会運営、他。

昭和36年9月15日 第2回役員会、於理工学部5号館807号室、各委員会の中間報告その他。

昭和36年10月21日 評議員会、於理工学部大学院会議室、工化会運営および総会開催の件。

昭和36年11月3日 第4回工化会総会、於理工学部5号館会議室、経過報告、役員評議員選出の件、その他。会長中原万次郎、副会長玉置彌栄、田所利男、他役員選出。

昭和37年3月2日 昭和36年度第1回役員会、於理工学部5号館807号室、工科校友会と工化会との件、その他。

昭和37年4月21日 工化会、校友会役員懇談会。於理工学部大学院会議室、出席者30名。

工科校友会と工化会との連がりを密にすると共に、今年度工科校友会会長の改選に伴い工業化学科より会長候補者を推薦するに当つて、工化会としては全面的に協力することを申し合せた。

昭和37年5月19日、先輩との交歓会、於工化科2号館22講堂、幹事会主催、工化会後援、出席者、東田政治(旧学1回、日産化学工業KK王子工場製造部長)、太田善造(旧学5回、美濃窯業KK常務取締役)、宇都宮秋二(旧学7回、三楽酒造KK課長)、加藤恭正(旧学7回、小川香料KK主任研究員)、東海林正(新学6回、小野田セメントKK)、森高(新学8回、

日本鋼管KK)、河野寿夫(新学8回、日本揮発油KK)、安達昭郎(新学9回、安宅産業KK)、学生出席者数約100名、化学工業の各分野で御活躍されている先輩諸氏をお招きして、後輩に対してのぞむこと、将来への指針などについてお話しをうかがい、その後学生との質疑応答があり、会は終始活潑、なごやかに、学生達は感銘深く種々の教訓を学びとり盛会裡に終了した。尚引続いて山ノ上ホテルで懇親会を催した。

以上5年間で卒業生数は設立当時が2,400名でしたが、37年3月現在で5,900名となりました。また第1回から第4回迄会長を務められた中原先生がお辞めになりました。工化会設立から今迄長い間、会運営を通して工化会発展のために御尽力戴きましたことを感謝致しますと共に、今後ともより一層の御指導と御援助をお願い申し上げます。尚後任は会規約により金丸競与化主任教授が今春より会長になりました。

名簿委員会報告

名簿雑感

昭和34年に工化会会員名簿が発刊され、会員各位に大変好評をばくし、その後多くの方々よりの要望もあつて昭和36年に増補版を発行したのはすでに御存じのことと思ふ。

増補版発行後、約1年を経過した現在、売れゆきは低調をきわめ、一例をあげると約2,000名の正会員に申込みの御案内状を送し御返答をいただいたのは100名に満たず、誠に淋しい限りであつた。このことは、工化会の将来に対する赤信号であり、名簿担当者にとつてきびしい良い反省材料であつた。

増補版の発行は、会員の勤務先、住所の移動訂正をなるべく早く会員の皆さんにお知らせしようと思つたことによるのは勿論であるが、相変らず財源の貧困な工化会の経済を考え、近い将来改訂版の発行をめざして、その基盤を確保しようとの含みを持たしていた。増補版の配布状況の悪さは、一に会員各位に増補版発行の趣旨をてつていし得なかつた名簿担当責任者である私の責任として深くお詫びする次第である。しかしながら、一つだけあえて苦言を述べさせて戴くならば、「そのうち一冊にまとまつた改訂版が出来るだろうからその時に」とか、「そのうち値下げするだろう」とかいう少数の人の声も耳にする。工化会の発展は、会員が会と苦勞を共にしてはじめて期待出来るのであり、現在の御協力をなしには将来はないということをよく考え願いたいものである。私の理想を申し上げるならば、「会員は工化会名簿を各自一冊必ず持つてゐる」ことである。これは正に母校愛より出るところの義務感に近いものである。

恐らくこの状態が実現されたときの工化会の隆盛は、きつ目を見はることであろう。

名簿の配布に出来るだけ御協力をお願いし、可とか改訂版

行の基金を確保して工化会の隆盛を夢みることを念願する次第である。

(名簿委員 上野敦行)

会計委員会報告

36年10月1日から37年9月30日までに工化会費を納めた方は下記の通りです。

もし記載もれの方は連絡下さい。

正会員会費(年間200円)

穴 沢 一 郎	尾 崎 武 二	野 村 吉 雄
安 藤 喜 文	太 田 武 一	浜 野 徳 男
安 藤 昭 郎	熊 田 沢 次	浜 田 勝 伸
石 川 好 隆	小 峰 光 弘	原 野 太 郎
石 川 隆 一	佐 藤 寿 兵	橋 本 肇 男
石 井 孝 二	沢 井 恒 和	平 野 武 淳 一
石 原 一 夫	佐 久 間 恒 福	富 士 田 恒 夫
磯 基 道 郎	芝 海 林 栄	福 島 野 宏
伊 藤 八 政 一	東 海 林 昭 七	星 島 野 孝 也
井 出 政 一 郎	鈴 木 昭 七	松 尾 田 尚 長
市 野 瀨 満 三 郎	鈴 木 道 雄	松 丸 山 上 親 行
市 川 次 良 郎	関 谷 田 和 夫	丸 邑 山 上 村 口 貢 良
入 倉 芳 郎 也	外 堀 芳 勇 二	宗 山 山 口 内 野 良 誠
植 竹 和 也 行 弘 春	高 波 野 俊 政 宗 勝 喜 孝 一	山 山 口 内 野 原 山 天 仁
榎 本 本 光 春	高 野 田 政 宗 勝 喜 孝 一	山 山 口 内 野 原 山 天 仁
岡 倉 (新 9 回)	西 山 口 野	矢 吉 横
小 折 口 谷 和 忠 雄	中 山 口 野	

10年會員會費(1,000円)

石井小川笠黒小香五	原上倉合本沢松野嶋	健吉一郎一次宏雄進夫新	二	佐塩清住玉名中福保	藤沢水吉置取川沢坂	六公史吉彌重浩	郎康彦雄栄庸雄巳博	溝村宗村山吉渡渡	上上村田崎崎刃刃	泰正喜一繁健	人彦武郎弘雄太郎
-----------	-----------	-------------	---	-----------	-----------	---------	-----------	----------	----------	--------	----------

編 集 後 記

学部3年 松田 英三

工化時報第6号が出来ました。発行予定よりも遅れたことを
おわび申し上げます。

工化時報は工化会発足に伴い復刊されたものであり、各回の縦
横の関連又母校との関連をこの時報を通して行いたいと思いま
す。今後各回の便りを出来るだけ掲載したいと思っておりますので大
いに御利用下さい。

尚、工化時報第7号は9月に発行予定でありますので、親睦
的内容、消息、級会、個人だより、又は学術的な事、その他な
んでも結構ですから御寄稿下さい。

宛先は 千代田区神田駿河台1-5

日本大学理工学部工業化学科内

工化会時報編集委員会

編集発行 工化時報編集委員会

責任者 穴 沢 一 郎

発行所 千代田区神田駿河台1-5

日大理工学部 TEL(291)0611~0613

印刷所 田中謄写堂 TEL(561)2257

中央区宝町3-3

目錄

第一章 緒論 1

第二章 經濟學之基本理論 10

第三章 生產要素與生產 25

第四章 消費與效用 45

第五章 市場與價格 65

第六章 利潤與競爭 85

第七章 政府與經濟 105

第八章 國際貿易 125

第九章 貨幣與金融 145

第十章 經濟發展 165

商務印書館



